

●令和2年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			最終		
教務部	「主体的学習者」の育成に向けて、指導法等を研究し、創意工夫を活かした特色ある教育活動を展開する。	授業におけるICTの利活用を推進するため、教員研修として公開（研究）授業を実施する。	B	B	○電子黒板導入に伴い、ICTを活用した授業の実施に向けた教員研修等の充実を図ることができた。今後は、新学習指導要領に対応した観点別評価に向けて研究を行う。
		「個別最適化」した学習指導法を研究するため、実践例を交流する機会を設ける。	C		
生徒指導部	生徒が主体的に「夢・感動・挑戦」の舞台を創り上げることができるような「学校行事」の検討や、生徒が自ら高みに挑戦することによって実現する「高いレベルの文武両道」への仕掛けづくりを行っていく。	球技大会において、個々に応じた種目を取り入れる。体育祭において、学年を越えた繋がりを意識させる。	B	B	○体育祭では、コロナ感染症予防対策を行いながら、体育委員会を中心に、生徒の創意工夫を生かした種目を設定する等、主体的な取組を行うことができた。 ○文化祭では、生徒会を中心として全校生徒の協力により企画と運営を行い、コロナ禍に負けない文化祭を実施することができた。引き続き、HR・部活動・生徒会活動を充実させることで、生徒一人一人の主体性を育て、主体的な集団として成長させたい。 ○生徒会が中心となり、学校祭でクラスTシャツを導入した。この取組を新たな文化として育てていきたい。 ○部活動加入率は89.1%であった。コロナ禍ではあるが、継続した高い加入率を維持することができた。
		文化祭において、クラスの一員であることを認識させる。	B		
		部活動において、加入率の向上と活動実績の広報活動を行う。	B		
進路指導部	模擬試験を通して生徒の学習意欲に火をつける進路指導を展開する。	模擬試験の結果に見られる学力の特徴や志望状況等を教科主任会議で共有するとともに、各教科の協力を得て、個々の生徒が意欲的に学習に向かうための復習すべきポイントをまとめ、生徒にフィードバックする。	B	B	○1・2年生それぞれを対象とした模擬試験の結果を踏まえて「各レベルの志望校に合格するために正解すべき問題とその問題の生徒の得点率」を一覧表にまとめて教科主任会で提示した。特に全国平均得点率を下回った問題については克服すべき弱点として教員間で共有し、授業の工夫・改善につなげるきっかけとすることができた。 ○2年生ハイレベル模試の受験者を対象に「答案返却会」を開催した。教科担当教員から押さえておくべきポイントや今後の学習について解説・助言をおこなうとともに、進路指導部から積極的にハイレベル模試を受験したことに対して激励し、難関大学受験に対するモチベーションを維持・向上させる機会とできた。
		ハイレベル模試の受験者を対象に、難関大学突破に向けて共に切磋琢磨して学習する意識を育み、次に取るべき具体的なアクションを伝える事後指導の機会を設ける。	B		
教育企画推進部	ICT環境の整備によって、本校の教育活動をより充実させる。	電子黒板の利用促進のための環境整備及び研修会などを実施する。	A	A	○Classiや電子黒板の導入に向けた環境を整備し、研修会を実施した。 ○Slackの導入を通じて、教員の業務改善を支援した。また他の分掌と連携し、コロナ禍における行事の配信等に協力した。 ○SSH3期目の取り組みであるパフォーマンス評価について、校内で実践と研修を行った。
		校務にICTを導入することによる業務改善の提案を行う。	A		
	本校の教育活動の柱の一つであるSSH3期目初年度の事業を実施する。	SSH3期申請内容に基づいて初年度計画の取組を実施し、効果検証と成果普及を行う。	B		
保健部	校内美化の徹底及び生徒の環境美化意識の醸成と、環境保全を自ら実行できる能力の育成。	『前日より美しく』をモットーに日々の清掃活動に取り組ませる指導を徹底する。また、月一回の大掃除の際に教室及び廊下の壁に付着したほこりを払う作業を加える。	B	B	○年度当初の休校時に、教職員による大掃除を行い、校内美化に取り組んだ。その成果を生かし、生徒にその環境を継続的に維持向上できるように清掃活動に取り組ませることができ、生徒の美化意識を高揚させることができた。 ○保健委員、美化委員のそれぞれの活動は実施できた。しかし、コロナ禍の影響で、文化祭等での発表の場がなく、両者を協働させての研究や発表はできなかった。 ○2・3学期の安全点検の結果を事務部と共有し、対応できるところから修繕してもらった。
		美化・保健の両委員会を協働させ、校内学習環境の調査・研究及び発表を行い、自らの学習環境の維持向上の意識を全校的に啓発する。	B		
		安全点検を学期に1回実施する。	B		

●令和2年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			最終		
図書部	「5C」を身に付けた人材の育成、「主体的学習者」の育成に必要な桃山高校の「学び」を探究する。	図書委員による自主的、積極的な図書館運営（日々のカウンター業務や班活動、読書月間における各種行事の立案と実践など）を行う。	B	B	○図書委員が主体的に図書館運営へかかわることができた。 ○「5C」の獲得に向けて、教科と協働したり、読書啓発活動を行ったが、今後も発展させていきたい。 ・今年度、コロナウイルス感染症予防のために芸術鑑賞が実施できなかった。
		課題研究をはじめとする各授業での図書館の活用や読書感想文集の発行、教職員の図書推薦などの様々な仕掛けを試みる。	B		
		「5C」に関する図書を充実させるとともに生徒に向けて紹介する。	B		
第1学年部	自他尊重の心や主体的な意欲などの非認知能力を育むことで、価値観の多様性の中で自己を確立し、主体的学習者となるために共に成長し合える集団を作る。	G S 探究 I やLHR、学年通信等を連動させて、個々の生徒の見方・考え方を学年全体で共有する。価値観の多様性に気づかせながら、自分自身について内省させることで行動の変容につなげる。	B	B	○コロナ禍における不安定な学校生活のスタートであったが、各担任がそれぞれの個性を発揮しながら、慎重かついねいな学級運営および個別指導を実施した。また、様々な課題を抱えた生徒に対して、複数教員が連携しながら、多面的に関わることができた。 ○行事や定期考査に向けた生徒主体の活動を実施し、各クラスのリーダー的存在となる生徒の活躍の場をつくることができた。 ○各分掌と連携しながら、講演会やSSH、探究の取組等を実施できた。また、学年通信やポートフォリオを活用し、自己を振り返らせたり、生徒同士の考えを共有させたりすることができた。
		手帳を活用して生活習慣を確立し、いつ・どこで・何に取り組むのか、見通しのある具体的な学習計画を立てさせるとともに、振り返りを習慣化させることで、実際の行動につなげる。	B		
		学級や個々の生徒の状況を日常的に交流・共有し、副担任も含めて複数の教員が多角的に生徒と関わる。教員それぞれの良さを生かし、主体的学習者のサポーターを目指す。	B		
第2学年部	学校の中核となる学年にふさわしい、学校生活の様々な場面で、主体的、自律的に行動できる生徒を育てる。	ホームルームや面談など、さまざまな場面で、手帳を活用し、主体的な生活管理、学習管理を行う。	B	B	○生徒1人1人が手帳の活用を通して、自己の目標の具体化を図ることや、活動の振り返りができるようになった。これにより、学習や行事などの取組を活性化させることができた。
第3学年部	生徒の学習意欲に火をつけ、最後まで粘り強く学び続ける集団づくりを行う。	生徒と面談を行うときには、学年独自の面談シートを使い、面談目的を明確にする。	B	B	○模試データを活用しながら、適切な時期に複数回の個人面談を実施できた。 ○紙媒体の学年通信だけでなく、音声媒体でも、学年の帰属意識を高める取り組みができた。 ○進路部と密に連携しながら、丁寧かつ戦略的な進路指導を進めることができた。
		学年集団への帰属意識が高まる学年通信を発行する。	B		
		進路指導部や教科担当者との連携を密にして、生徒の弱みと強みを把握して、適切な支援を行う。	B		
事務部	学習環境のICT化に向け、限られた予算の中でも優先的な予算編成を行う。	ICT先進校への視察旅費の確保。	B	B	○コロナ禍のため、府外への出張は不可能であったが、府内ICT先進校へは、希望どおり出張できるよう、旅費の確保ができた。 ○プロジェクト・タブレット等ICT機器についての予算を、一定確保できた。
		ICT化に向けての予算の確保。	B		

●令和2年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			最終		
国語	国語で的確に理解し伝え合う力を高め、思考力、判断力、表現力を伸ばす。そのために、「主体的・対話的で深い学び」を通して、主体的学習者を育成する。	「主体的・対話的で深い学び」への授業スタイル確立や、ICT利活用の研究・実践を進め、技術や方法を共有し、「チーム国語科」として効果的な指導を行う。	B	A	○ICTについて、挑戦的な実践を行い、成果を教科で共有できた。 ○パフォーマンス課題を通して、分析力・思考力・表現力を伸ばし、大学入試新傾向問題への対応力を育成した。 ○各学年ともに個々の生徒の多様性にに応じた指導を行った。工夫を重ね、さらなる個別最適化を図っていきたい。
		生徒の多様性に対応できるよう「個別最適化」した学習指導を行うことによって、意欲を喚起し、それぞれが主体的に学習を進めるための具体的方法と考え方を身につけさせる。	A		
地歴公民	興味・関心と学習意欲を高め、自ら学ぶ力、考える力を育成する。	板書、プリントを充実させ、資料（写真、統計、史料等）や視聴覚教材を有効に活用する。	B	B	○板書、プリントを充実させ、資料（写真、統計、史料等）や視聴覚教材の有効な活用について、教科で研究できた。 ○電子黒板の活用に向けて教科会議を利用した勉強会を実施するなど、ICTを利活用した授業の構築に取り組んだ。今後も各教員が各自の課題改善に向けた研修を続けていきたい。
		ICTを利活用した授業やアクティブラーニングの授業を研究・実践し、「主体的・対話的で深い学び」による思考力・表現力等の育成を図る授業改善に取り組む。	C		
数学	学習意欲の向上を背景とした自発的学習習慣の形成の実現と数学的、論理的思考力の獲得を通して、実践問題に取り組む学習者を育成する。	小テスト、定期考査、模擬試験の到達度目標を早期に提示することで、学習計画の作成を習慣化させる。目標へ到達する過程においては、個々の生徒の学習方法等を生かすように工夫する。また、習熟度の高い生徒向けに単元内良問を提示し数学的興味を持続させる。	B	A	○パフォーマンス課題を長期休業中の課題として実施し、論理的に考えて記述する力を伸ばすことができた。 ○新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う休校措置のため、年度当初の計画を修正、見直す事態となったが、授業展開・教材の工夫により概ね予定通り実施することができた。 ○GS探究IにおいてExcelを用いた統計処理についてのパフォーマンス課題を実施し、科目初年度としての目標は一定達成できた。
		提出されたレポート形式、記述形式の添削課題の生徒への共有を通して、数学的、論理的思考力を洗練させる。また、数学検定を中心として、数学オリンピックや数学コンテストへの参加を促し、授業とは違う観点で数学に触れる機会を増やす。	A		
		深い学びにつながる発問の工夫や視覚的教材の工夫を今年度も継続して行う。また、模擬試験の結果から分野ごとの正答率を把握し、授業や指導計画にフィードバックする。	B		
		今年度からの新科目「GS探究I」について、数学分野の指導計画・評価計画の確立と教科内での共有化を図る。	A		
理科	見通しをもった観察・実験の実践など科学的に探究する活動の充実によって、生徒の興味関心を引き出し、主体的学習者の育成及び学力向上につなげる。	主体的な学習を促す指導方法や実践内容を共有し、授業の質を高める。	B	B	○主体的な学習を促すICTを活用した実践やその報告を理科会や小教科内で共有することができ、コロナ禍においても授業の質を高める共通認識をもつことができた。 ○コロナ禍で、観察・実験を積極的に実施することができなかったが、感染防止対策の観点から実験形態や実験内容を工夫し、科学的に探究する機会を授業に組み込むことができた。
		観察・実験など科学的に探究する機会を組み込んだ授業をデザインする。	B		
		観察・実験内容の改善、新規開発を行うことにより、学習の質の向上につなげる。	B		
保健体育	体育・保健の見方・考え方を働かせて課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成する。	具体的な知識と汎用的な知識とを関連させて理解できるようにするとともに、科学的知識を基に技能を身に付けたり、技能を身に付けることでその理解を一層深める等、知識と技能を関連させて指導する。	B	A	○主体的に学習に取り組ませる授業が、体育・保健の両科目で展開できた。自主的な学習への取組を促すICTの活用にも積極的に取り組み、授業の質の向上に至った。 ○体育では新型コロナウイルス感染防止対策の観点より、当初のカリキュラムから内容を変更せざるを得なかったが、心身の健康の保持増進と体力の向上を図ることができた。
		自他や社会の課題を発見し、合理的、計画的に解決したり、新たな課題の発見につなげたりすることができるよう知識を活用したり、応用したりして、思考し判断したことを、根拠を示したり他人に配慮しながら、言葉や動作などで即座に表したり、図や文章及びICT機器等を利活用して筋道を立てて伝えたりすることができるよう指導する。	A		
		愛好的態度及び健康・安全、公正、協力、責任、参画、共生について、汎用的な知識を関連させて指導することで、主体性を促し、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力を育成する。	A		

●令和2年度「学校経営計画（スクールマネジメントプラン）」実施段階●

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			最終		
芸術	音楽：新学習指導要領の趣旨を踏まえた学習指導の徹底を図るとともに、本校生徒の実態に即した授業展開の工夫に努める。	主体的に音楽に関わり、感受する力を育成するため、表現、鑑賞のそれぞれの学習内容について、批評活動を積極的に取り入れる。	B	B	○表現領域では、五音階を用いた創作やグループアンサンブル、鑑賞領域では、音楽の構造に着目した批評活動を行い、生徒が主体的に音楽に関わる能力を育成することができた。
	美術：5Cの育成を目指した授業を組み立てる。	共同制作やグループ内のディスカッションの活動を積極的に取り入れた授業を組み立てる。	C	C	○コロナ禍のため、協働的な取組が予定どおり実施できなかった。
		作品の校内展示や学校の諸活動と連携した取り組みを進め、美術やデザインと社会の関係性について考えたり、客観的な視点で自分の表現を見つめさせる機会とする。	B	B	○自宅学習中の課題から「コロナ禍と人権問題」のテーマで考えさせ、表現と社会の関係性について考えることを狙った授業を組み立てることができた。
	書道：書に親しむ活動を通して、感性を高め、書写能力の向上を図り、主体的な学習者の育成に向けた授業展開を行う。	基礎・基本を身につけ、「表現」、「鑑賞」の学習内容に、批評活動を積極的に取り入れた授業展開を行う。	B	B	○「漢字の書」「漢字仮名交じりの書」「仮名の書」に加え、「篆刻」の制作を実施し、選択者全員で押印した合作を作成した。また、生活の場で生かされている書に目を向け鑑賞する姿勢を養えた。各分野において批評活動を取り入れた。
英語	英語学習における「主体的学習者」を育成する。	授業、家庭学習を通して、主体的に英語力向上に取り組めるよう、1年間の学習計画と効果的な学習方法を明確に示す。	A	A	○全学年で、小テスト・課題提出等の年間予定表を、4月初めに示し、生徒の主体的かつ計画的学習を促した。 ○全学年で、共通の解説プリントを使用し、簡潔な解説につとめ、言語活動に充てる時間を確保した。 ○第1学年で、対話式パフォーマンス課題を実施した。 ○英語学習の目標達成度評価については、今年度実施できなかった。
		教員による解説を簡潔にし、ペア・グループワーク、パフォーマンステスト等を通して生徒の英語の発話量・読解量・活動量を増やす。	A		
		パフォーマンス課題の改良・目標設定による主体性の育成に取り組む。具体的には、第一学年を中心に、従来のスピーキングによるパフォーマンス課題を対話式に変え、ライティングによるパフォーマンス課題成果物については教師の評価の前に相互評価を取り入れる。加えて、英語学習の目的・目標を言語化させ、目標達成度を数値化させる。	B		
家庭	人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技能を総合的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。	講義や実習・実験を通して、家族の健康と衣食住についての知識を身につけさせ、実践する力を育てるように指導する。また、清潔に衣服を管理し、時には取れたボタンをつけ補修する程度の力を育てるため、被服製作実習を取り入れる。	B	B	○コロナ禍で調理実習やシニア体験など実施できないものがあった。被服実習は感染予防策を講じながら取り組むことができた。 ○コロナ感染を予防した生活様式について考える授業を展開することもできた。
		消費生活について、経済のしくみを理解し、生活を管理できるように指導し、ロールプレイなどを行い、消費行動が環境問題に関わることを理解を深める。	B		
		乳幼児と高齢者の生活や福祉についても、ライフステージごとの心身の変化を「シニア体験」「マタニティー体験」実習により理解を深める。	C		
情報	SSH 3期目で新設された学校設定科目「探究I」のカリキュラムを創出・実践し、5Cの資質能力を効果的に養うことのできる指導方法を研究する。	アクティブ・ラーニングを重視し、適宜探究型の授業を取り入れる。	B	B	○新型コロナウイルス対策による教育活動の制限のため、アクティブラーニングの実施は困難であった。しかし、フェイスシールドとマスクの併用等の工夫を行い、必要最小限ではあるが、探究型のパフォーマンス課題に取り組むことができた。また、ルーブリックによる評価についても試行・研究を進めることができた。
		パフォーマンス課題を設定し、ルーブリックによる評価を試行する。	B		
グローバルサイエンス	予測不能な次代で活躍するために必要な資質・能力「5C」を育成するに相応しい教育環境を創造する。	第1学年の各GS科目において、各担当者を中心に育みたい力を整理し、その力に対応するルーブリック及びパフォーマンス課題の創出を試行錯誤する。	B	B	○各科目でパフォーマンス課題について試行した。各試行について、担当者同士でのリフレクションと生徒へのフィードバックの質の向上を今後も図っていきたい。

学校関係者評価委員会による評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍の中、研修旅行、文化祭、体育祭、卒業式等の学校行事が実施できたことは、生徒の成長にとって意義深いことである。生徒間のコミュニケーションやつながりを大切にし、今後も人間形成をおこなってほしい。</li> <li>・今後もコロナ禍は続き、価値観が変化していくことが予想される。学校はその変化に対応し、工夫して教育活動を行ってほしい。</li> <li>・各分野において、生徒・保護者からの高い評価を得られる活動が展開できている。一方で、HP等での教育活動の発信には改善の余地がある。</li> </ul>
-----------------	--

次年度に向けた改善の方向性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍での教育活動で認識できた、学びの「場」としての学校の機能を一層高めていく。授業はもちろん、学校行事や部活動においても、桃山という場でこそ得られる体験の機会創出を目指していく。</li> <li>・次年度は、新学習指導要領における教育課程、1人1台端末（BYOD）を中心とした「桃山まなびのICT化」等、教育の根幹に関わる研究課題について、全校体制で取り組んでいく。</li> <li>・SSH 3期2年目を迎えるにあたり、GS科目探究I・IIの充実や、トップ人材の育成プログラム、パフォーマンス評価研究等、今期の中心的課題への取組を進めていく。</li> <li>・生徒の状況や心理の変化を把握し、支援の必要な生徒に対して、早期に組織的に対応できる体制を整えていく。</li> <li>・本校の魅力創出と発信について、手法の研究を行う。</li> </ul>
---------------	---